



# わたしで生きる日々を…。



山元眞やまもと まこと 神父

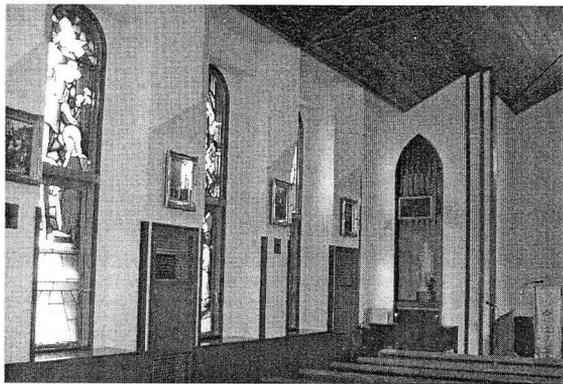
行橋市の隣に豊津町がある（昨年の町村合併で今はみやこ町と呼ばれている）。そこに豊津教会がある。行橋教会の巡回教会である。司祭が定住していないので巡回教会と呼ばれるのだが、人口二万三〇〇〇人のこの町に約二五〇人の信者がいる。行橋教会所属の信者は人口七万人のうち約五五〇人。同じ行橋市内の新田原教会所属の信者を含めると二三〇〇人以上になる。豊津教会は二〇〇〇年に創立五十周年を祝った。それを機に新聖堂を建てた。信者の「ルーツ」は長崎の五島列島。今の子どもたちは最初に移住してきた方から三代目。

毎週水曜日には朝七時からミ

サがあり、十人程が参加する。主日のミサは日曜日の朝七時から。続いて九時から行橋教会でミサがあるのですぐに戻らなければならぬ。信者の皆さんとゆっくり語り合うこともできないので、第一日曜日だけは九時からミサをして、その後にティータムをもうけた。主日のミサ参加者は百人弱。第三日曜日の前晚は土曜日の夜七時半から。このミサは子どもとともにささげるミサ。子どもたちが典礼の奉仕をする。

教会学校は毎週金曜日の午後四時から。教会から歩いて三分のところ小学校があるので、子どもたちは下校途中にカバンをさげたまま教会に来る。出席

率は九割以上。全員がそろうま  
で教会の広い庭で遊びに興じる。



この豊津教会の特徴のひとつ。  
子どものオルガニスト。今は一

人の小学六年生と二人の中学一年生がミサでオルガンの奉仕をしてきている。他に二人いるが、現在中学三年生で「引退」している。長い間オルガニスト不在の教会であったが、この「引退」した二人が小学四年生の時にデビューしてくれてから伴奏付きで聖歌が歌えるようになった。

男の子と女の子。この子たちは、小さい頃からオルガンやピアノやエレクトーンを習っていたわけではない。子どもとともにささげるミサを始めた頃、オルガンでミサの奉仕をしたいということで練習を始めた子どもたちである。金曜日の教会学校が終わった後、聖堂のオルガン

で練習をしてミサに臨んだ。最初は片手で弾き、それから両手で弾けるようになり、さらには伴奏譜を使って弾けるようになった。一人がミサの聖歌の全部を伴奏するのではなく、二人で手分けして伴奏する。無心で一生懸命伴奏している姿には感動する。わたしも神学生時代にオルガニストをしていたが、この子たちの奉仕の精神には脱帽した。できることを、できるだけ、精一杯……。この精神はすばらしい。大人にはなかなか真似のできないことである。上手とか下手とか、歌いにくいとか；いろいろと評価される。奉仕の気持ちに感心する人はあまりいない。；だから、大人はそのような声を気にしてなかなか弾けないものようだ。

「現役」の三人の女の子のオルガニストも、この方法を受け継いでいる。少しずつ練習を重ねて、弾ける曲を弾ける形で伴奏する。単音だけで伴奏する子もいる。一人のオルガニストがひとつのミサを担当するのはなく、三人でひとつのミサを担当

する。だれも伴奏できないときは、無伴奏で聖歌を歌う。練習には結構時間を要する。学年が上がっていくと、それだけ忙しくなっていく。他にした



いことも生じてくる。無理になつたらオルガンの奉仕をやめることになる。ずっと続けてほしいのだが、真のボランティアなので仕方ないだろう。ボランティアとは強制するものではなく、本人が望んでするものだから。

「引退」した二人は今ではオルガンではなく、朗読などでミサの奉仕をしている。

ある日、信者の間からオルガン奉仕の子どもたちに「御礼」をしてはどうかという意見があった。特別に時間をとって一生懸命奉仕してくれているから、というのがその理由だった。少し話し合っ、すぐに結論が出た。それはおかし。お金を渡すなんてことは大人の発想。子どもたちはそんなことは望んでいない。奉仕の精神を尊重して「ありがとう」の言葉掛けをしようということになった。当然のことだろう。彼らは報酬を求めてオルガン伴奏をしているのではない。他に伴奏する人がいないから、自分ができるところをしようとしているのである。これが真のボランティア精神、奉仕の精神だと思う。彼らに感謝し、励ます気持ちがあれば、技術的なことで不平など言わず、彼らの伴奏で心のこもった聖歌を歌うことではないかと思う。

「わたしにできることを……」この気持ちを大人も見習いたい。



# 株式会社 吉本洋紙店

本店 〒104-0041 東京都中央区新富2-7-4

☎03(3551)4141(代)/2143 FAX03(3551)3939

厚木支店 〒243-0807 神奈川県厚木市金田1017

☎046(223)6931

FAX046(223)6930